美郷町へのアクセス

車でのアクセス

広島以東から

三次I.C.下車～国道54号線を北上、赤名より県道美郷飯南線に入って20分

広島以西から

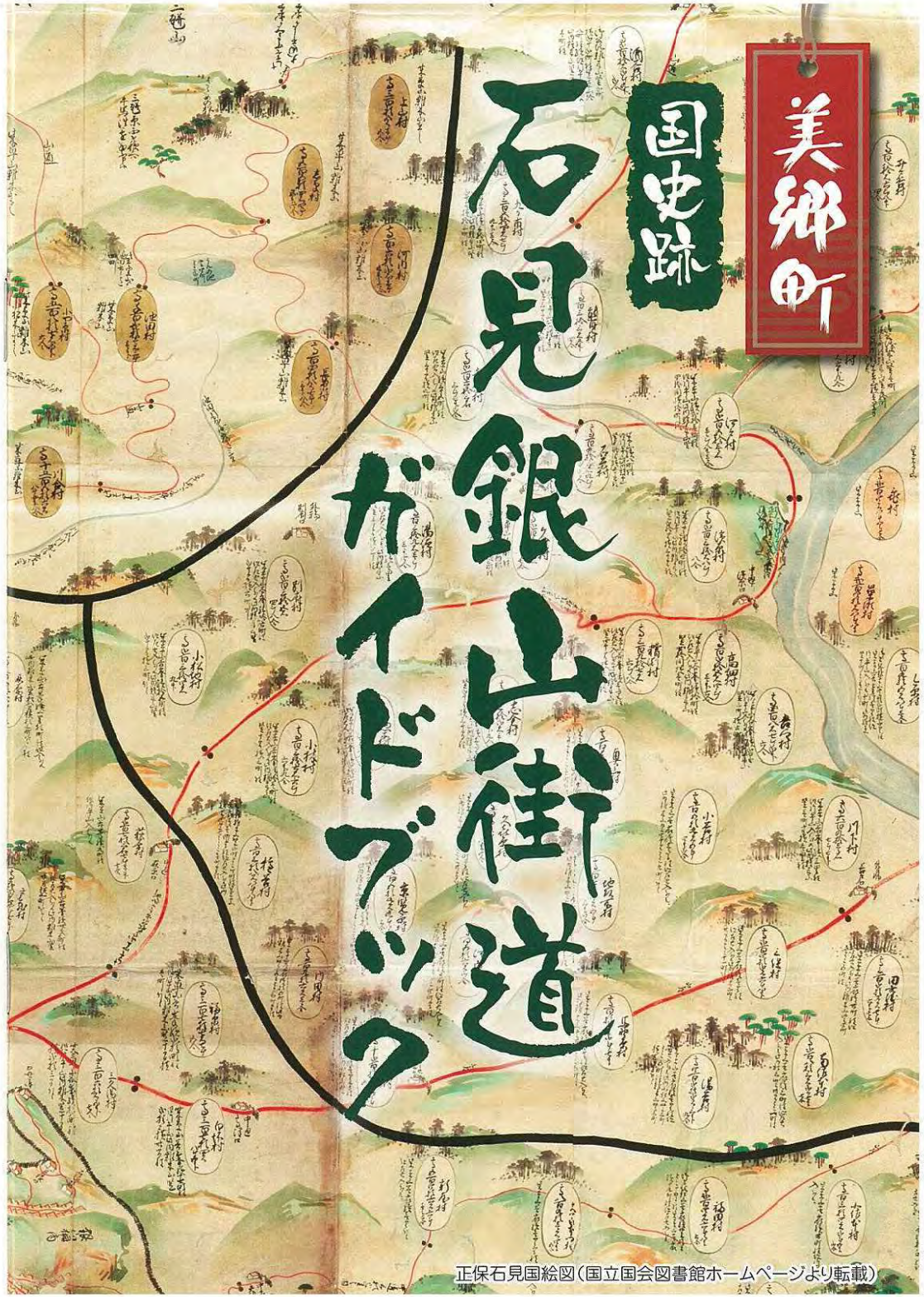
大朝I.C.下車～国道261号線を北上、因原より県道川本波多線に入って20分

松江方面から

国道9号線～国道54号線を南下、赤名より県道美郷飯南線に入って20分

発行:美郷町産業振興課　島根県邑智郡美郷町粕渕168　TEL0855-75-1214
監修:美郷町教育委員会　島根県邑智郡美郷町粕渕168　TEL0855-75-1217

（令和元年12月印刷）



正保石見国絵図（国立国会図書館ホームページより転載）

美郷町の石見銀山街道

石見銀山街道エリア概要

①やなしお道エリア

小松地～湯抱～高畑～小原河原
約9.6km　所要時間 徒歩3.5時間
車通行不可

②小原・浜原宿エリア

小原河原～四日市～浜原～畳岩
約5.1km　所要時間 徒歩2.0時間

③九日市宿エリア

畳岩～九日市～酒谷～境木
約13.3km　所要時間 徒歩4.0時間

16世紀、「石見銀山」は中世ヨーロッパの地図に銀鉱山として載っている、日本でも数少ない場所です。この頃、石見銀山で生産された銀は、銀山があった佐摩(さまむら)村の地名から“ソーマ銀”と呼ばれ、東アジア・欧州諸国で行われていた貿易をその質の高さで支えていました。その後400年続いた銀の精錬も現在では行われていませんが、大森で生産された銀がアジアとヨーロッパの文化的交流を導いたことや、その遺跡と残された文化的景観が評価され、平成19年には世界遺産へ登録されました。

この世界を動かした銀は、大森からここ美郷町を通り三次、尾道、大阪、そして世界へと流通して行きました。大森から尾道に至る銀の輸送路は「銀山街道」と呼ばれていますが、美郷町を約28km走るこの街道沿いには、今でも昔からの言い伝えや銀山にまつわる史跡が残っています。

「やなしお道」を歩く

小松地・高畑

◆中国自然歩道入口

箱茂の松から約2kmの地点、ここから街道は徐々に登りはじめます。このあたりからの尾根道は「やなしお道」と呼ばれ、石見銀山を出てから最初の難関となった山道です。今でも当時の面影をそのまま残し、文化庁の歴史の道百選にも選定されています。

◆十王堂

竹林に囲まれたこの場所は、銀山街道と石見一の宮、物部神社へ向かう往還との交差点に当たり、行き交う人々で賑わいました。当時はこの角に十王と六観音を安置した小堂が建てられ、旅人のためのお茶屋も開かれていました。

◆茶縁原（ちゃえんばら）

十王堂を過ぎると、やがて左側に視界が開け三瓶山の雄大な姿が現れます。人々は三瓶山の景色を楽しみながらしばしの休憩をとったのか、このあたりを茶縁原と呼んでいます。当時周辺の山々では盛んに炭焼きが行われ、銀山へと供給していました。

◆邑智北農道（おおち）

平成十二年からの農道整備により140mの街道が矢われましたが、この時の調査により、街道の整備に版築工法が用いられていたことが明らかになりました。版築状に突き固められた路面はとても固く、400年を経ても崩し難いものでした。

◆土橋（どばし）

谷間に土を盛り上げ、人為的に街道の嵩上げが行われています。長さ20mほどの土橋は谷底から切り立ったように作られており、当時整備に携わった人々の苦労を窺うことができます。右手には開拓地の牧場も見ることができます。

◆七本槙別れ

やなしお道に車で登ることのできる唯一の場所です。ここから七本槙までの約300mは生活道として利用されており、右手には邑智郡の山々が一望できるポイントです。

箱茂の松 1.1km 井戸公の頌徳碑 0.9km 自然歩道入口 0.4km 十王堂跡 0.5km 邑智北農道 0.9km 七本槙別れ 0.3km 七本槙

井戸平左衛門の頌徳碑（いどへいざえもんのしょうとくひ）

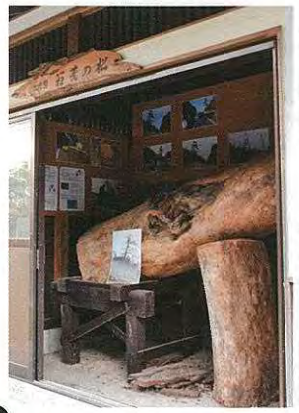
井戸平左衛門の肖像（井戸神社所蔵）

石見銀山には慶長6年(1601年)に初代奉行として任命された大久保長安から始まり、江戸時代270年間で59名の奉行や代官が任命され、徳川幕府の直轄領である銀山領支配の重責を担いました。このうち、大久保長安から数えて19人目に大森代官として任命されたのが「井戸平左衛門」でした。着任の日には旧村の庄屋をはじめ村役人は揃って国境まで出迎えたと言われています。

美郷町の銀山街道沿いには、この平左衛門の遺徳をたたえる碑が残されています。平左衛門は、享保16年(1731年)に江戸より下向し着任しましたが、翌享保17年には江戸期の三大飢饉の一つといわれる享保の大飢饉に遭遇します。平左衛門はこの飢饉に際して飢えに苦しんだ領民を救うため、自らの財産で米を購入したり、幕府の許可を待たず代官所の米蔵を開いて人々に米を与えたと言われています。また、当時移入の難しかったサツマイモを、いちはやく薩摩藩から持ち帰り栽培させ領民を救いました。このサツマイモ栽培によって、以後の天明の飢饉、天保の飢饉には銀山領内では餓死者を出さなかったとも伝えられています。

平左衛門はその徳によって「芋代官」「芋殿様」と敬慕され、「泰雲院殿義岳良忠居士」（たいうんいんでんぎがくりょうちゅうこじ）、「井戸正明公碑」などと刻まれた頌徳碑が、江戸時代末期から明治・大正にかけて石見地方各地に数多く建てられました。美郷町内にもこの小松地の碑を含め23基の碑が建てられています。

箱茂の松（はこものまつ）



石見銀山から福原農道、荻原農道を抜け約8km、大田市との境界あたり美郷町小松地に「箱茂の松」と呼ばれる大きな松が一本立っていました。

もともとは一里塚の松ではなかったかとも言われています。銀山から大阪へ向かう銀の輸送隊は、大森を朝五ツ時（8時ごろ）に出発し、途中、荻原で小休止した後、その松を目指し美郷町内へと進んで行きました。こうした銀輸送の隊列や街道を行き交う旅の人々を、この松は何百年も見守り続けてきたことでしょう。

その松には次のような逸話が残っています。

「大森より三次に至る銀山街道筋小松地字箱茂に、一の枝十二、三mもある大きな松があった。沿岸部の魚売りはいつもこの松を目標にして、ここで一休みしていた。魚売りが自分のうちに帰ってから箱茂のお松のことを話し合っているのを聞いたある魚売りの女房が、お松というのは男を惑わす女のことだと邪推して、この松を呪うために枯死してしまった。」（邑智町誌より）

現在立っている松は箱茂の松の三代目の松で、二代目の松は松枯れのため、平成23年3月27日に伐採されました。伐採の際に測定した記録によると、樹高16.8m、根周囲2.2m、直径70cm、年輪数160本という大きなものでした。現在は展示小屋が地元の方々により建設され、根元部分の幹が納められています。

石見銀山の山々

箱茂の松から大森方向に振り返ると、銀山方面の山々が一望できます。左側の最も高い山が大江高山(808m)、中心のなだらかな山が銀採掘の中心となった仙ノ山(537m)です。一連の山々は大江高山火山群と総称され、この火山活動と地下から湧き上がる熱水の作用によって、約100万年前に石見銀山の鉱床は形成されました。

戦国期以降になると石見銀山の銀が戦国大名の資金源として重要視され、仙ノ山は毛利氏、尼子氏らによる争奪の対象となりました。仙ノ山の左に見える矢滝城山(634m)や右に見える要害山(414m)には、銀山支配の軍事的重要拠点として城郭が築かれていました。

版築工法（はんちくこうほう）

徳川氏が銀山を支配した慶長年間から、この道は大森から尾道への産銀輸送路として利用されることとなり、初代石見銀山奉行大久保長安の指揮のもと、「官道」として整備が行われました。道幅6尺（約1.8m）に整備されたこの道には中国から伝わった「版築工法」が用いられたことが平成12年の調査で明らかになりました。真砂土と粘土を交互に重ね、塩水を加えて突き固めたこの工法は、今日のコンクリート工法に相当する技術として、中国では万里の長城などの城郭や建物の基礎にも用いられました。塩水は植物の根の進入を防ぎ十王堂付近の街道に孟宗竹の繁茂が見られないのは、この工法によるものです。

七本槙 0.4km 水溜場跡 0.1km 茶屋屋敷跡 0.5km 一里塚 0.5km ポウポウ坂 0.4km 大名石 0.5km 湯抱別れ

375

至湯抱温泉

中国自然歩道

七本槙

銀山街道の標識

鉄塔

鉄塔

民家

茶屋屋敷跡

右下り行き止まり

ポウポウ坂通行困難

至湯抱温泉

中国自然歩道

銀山街道直進

説明板

大名石

一里塚

水溜場跡

ポウポウ坂

湯抱別れ

茶屋屋敷跡

やなしお道（やなしおみち）　国史跡指定

銀山街道は小松地、別府を通り、旧小松地小学校の東側に向かってなだらかな尾根道にさしかかります。このあたりから湯抱地内まで標高およそ280mを約7km、当時の面影を最もよく残していると思われるこの道は、地元では「やなしお道」と呼ばれています。

やなしお道の歴史は古く、常陸国（現在の茨城県）からこの地に移住した佐波（さわ）氏の正平9年（1354年）の文書にもその記述が見られます。この文書は佐波氏七代実連の所領の一部を息子に譲り渡す内容ですが、その所領の境としてやなしお道が記されています。今から600年以上前の古い時代から既にこの道は存在し、陰陽連絡の主要な道として利用されていたものと想像されます。

戦国時代には毛利氏の石見の侵攻路としても利用され、尼子氏との間で銀山争奪合戦が繰り広げられました。徳川氏が銀山を支配した江戸時代以降は、産銀を運ぶ要路として利用され、牛馬300頭、人足400人の銀輸送隊がこの道を進みました。

やなしお道は古くからの情景や歴史的な価値を残すとして、平成8年に文化庁の「歴史の道百選」に指定され、一部は中国自然歩道としても整備されています。

「萩藩閥閲録」

譲渡す
善次郎四郎常連所領の事
石見国佐波郷の内　くほ・お原両村　東は小深のしふ谷の湊へ西はやなしほのみちを境う。実連重代所領たる間、善次郎四郎常連に永代譲り渡す処成り……。
正平九年十月十九日　　隼人正　実連

◆七本槙（しちほんまき）

石見銀山から約11km、振り返ると大江高山など銀山方面の山々が望めます。標高270mの場所ですが太古の時代は湖沼で、周りの地層には丸い石が確認できます。粘土層は良質で特産の石州瓦の原料に使われています。

◆茶屋屋敷跡

街道の数カ所にある茶屋跡の中でも大きなものです。屋敷前には馬に水を飲ませた水溜場があり、奥にはさらに3カ所の水溜場があります。この水は飲料水や炊事用に使われていました。

◆水溜場跡（みずためば）

銀山街道沿いの路傍には水を溜めていた井戸の痕跡が数カ所に見られます。以前は共同のため池として利用されており、馬に飲み水を与えたり路を洗ったり、人の飲み水や畑の水やりにも使われていました。一年中水が涸れることがなかったと言われています。

◆一里塚

銀山から3里、一里塚のあった場所で「一里塚上」「一里塚下」などの字名が残っています。一里塚の松は大きな黒松でしたが60年ほど前に倒れ、現在は切り株だけが残っています。街道を挟むように塚の跡も残されています。

炭方六か村（すみかたろっかそん）

銀山の繁栄を支えた美郷の山々

銀山の経営と銀精練には多量の材木と木炭が必要でした。幕府は、銀山の経営を円滑に行うため、銀山近隣の32ヶ村を「御囲村（おかこいむら）」として指定し、銀生産に必要な資材の供給を請け負わせていました。このうち、やなしお道周辺の小松地村、別府村、惣森村、志君村、湯抱村は銀山との交通の便が良いことから、大田市の忍原村と合わせ「炭方六か村」に指定され、毎月山林の面積に応じて銀山へと木炭の供出を行っていました。炭方六か村から供出される木炭は「村送り炭」と称し主にコナラを原料としましたが、とくに銀精練用の炭は吉舎炭（きさ）と呼ばれ良質なものでした。やなしお道の沿道には今でもその末裔と思われるコナラの木を見ることができます。街道周辺の村々は単に銀の輸送路としてだけではなく、銀山の経営においても経済的・社会的に強い関わりを持っていました。

◆ポウポウ坂

湯抱温泉に下る別れ道ですが、現在は通行ができません。修行の山伏がホラ貝をポーポーと吹きながら歩いたことが名前の由来とされています。湯抱温泉は斎藤茂吉の研究により万葉の詩人、柿本人麻呂の終焉の地であるとされた場所です。

◆大名石

歩道の階段を上ると左手の路傍に大きな岩が現れます。これらの石は一般には「荷置き石」と呼ばれ街道沿い数ヶ所に見られますが、地元ではこの石を特に大名石と呼び、昔、大名が座られた石だと伝えられています。

◆湯抱別れ

中国自然歩道との分岐点です。当時の姿そのままの銀山街道はこのまま直進し、大難所と言われた「やなしお坂」に向かいます。中国自然歩道はここから左に迂回し、2.2kmほどで湯抱温泉に下ります。

一里塚

やなしお道の一里塚跡

このやなしお道の一里塚は道の両側に残されており、道とともに住時を偲ばせる貴重なものといえます。

一里塚の起源は中国で、塚の側に槐の木を植えたり標識を立てたりして目印としていました。日本では、平安時代末期に、奥州藤原氏が白河の関から陸奥湾までの道に里程標を立てたのが最初と言われています。

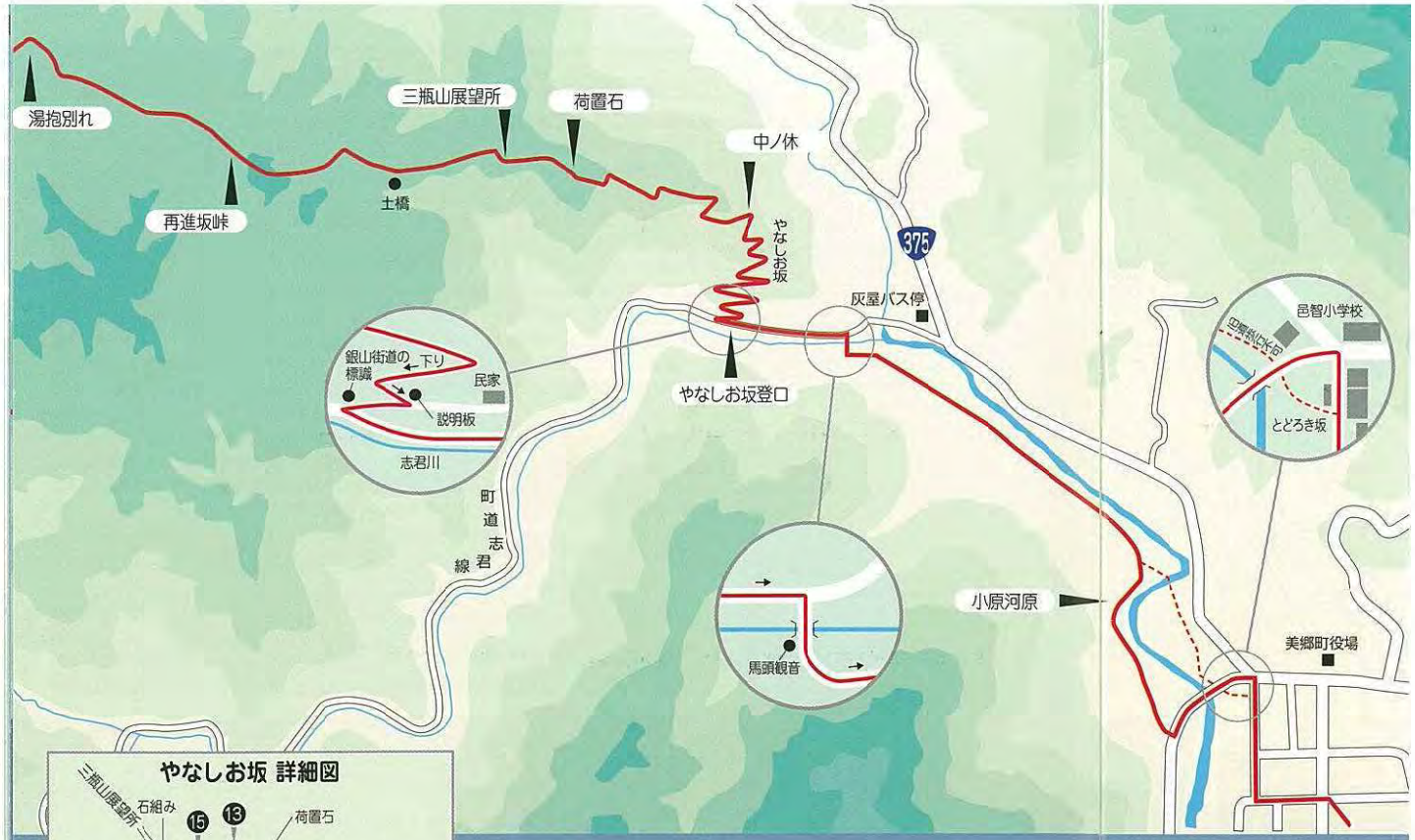
一里塚が全国的に整備されるようになったのは江戸時代からです。慶長9年2月4日（1604年3月4日）、江戸幕府は日本橋を起点として全国の街道に一里塚を設置するよう指令を出しました。一里塚の設置は、大久保長安（初代石見銀山奉行）の指揮の元に行われ、10年ほどで完了しました。一里塚には榎や松などの木が植えられ、木陰で旅人が休息を取れるように配慮されていました。

ポウポウ坂の伝説

湯抱温泉

湯抱温泉はその初めは一ヶ所しか湯の口がなく、湯客を泊める宿も小さい木賃宿のほか、家というものはありませんでした。

ある日の夕方一人の山伏が一夜の宿を乞いましたが、山伏の恐ろしい顔つき、うす汚い見慣れぬ風体を怪しんで宿屋は断りました。山伏は「わしが汚いなりをしているから泊めてくれないのだろう、いまに見ておれ思い知らしてやる」と言って出ていきました。そしてポウポウ坂の辺りでポウポウとホラ貝を吹くと、一ヶ所しか湯口がなかった湯が数カ所から吹き出し、あたり一面に湯があふれました。この木賃宿はその後次第に没落の運命を辿っていったということです。今もその坂道をポウポウ坂と呼んでいます。



やなしお坂（やなしおざか）

やなしお道の「湯抱別れ」から直進する尾根道は、当時の面影をよく残す昔ながらの山道です。この道をさらに1kmほど進み三瓶展望所を過ぎると、やがて志君川に向かって下るつづら折りの急坂にさしかかります。標高250mあたりから一気に下るこの坂は「やなしお坂」と呼ばれ、往来する人々や牛馬を苦しめた銀山街道の大難所でした。このやなしお坂を含む荻原村から粕渕村間の人馬賃銭は、本馬1頭に152文、人足1人に76文と定められていましたが、嘉永七年（1854年）の「御用伝馬人足継立定書」（林家文書）には、この坂が難所のため、この坂を通る荷役には10文の割増賃金が公認されていたことが示されています。また、この坂の途中には旅人が荷を置いて休んだという「荷置石」や「古い石碑」なども残っています。

御用伝馬人足継立定書

荻原村粕渕村之間、字八名塩坂難場有之候ニ付、荻原村より継立候とも粕渕村より継立候とも、人足壱人ニ付銭拾文宛増賃可請取事

銀山からの産銀輸送は当初は年に数回行われていたようですが、延宝元年（1673年）年からは年1回となり、前年の十月からその年の九月までの産銀一年分を、旧暦十月下旬頃に運びました。灰吹銀は五百匁（約2kg）ずつ紙で包んで、十貫目入の木箱に入れ、馬一頭に二箱ずつ負わせました。そして荷の上には一尺四方の白布に葵の紋を染めぬいた小旗を立てて出発しました。

やなしお坂 詳細図

◆再進坂峠

箱茂のお松から7km、やなしお道の最高地点で標高はおよそ300mあります。街道左手の木陰からは三瓶山を望むことができます。街道はこれより徐々に下りはじめ、難所といわれたやなしお坂へ向かいます。

◆土橋（どばし）

左右の立木に隠れるように土橋が確認できます。何十年も人の手が加わっていませんが、現在でもしっかりと昔ながらの道が残っています。注意してみると、このあたりに2カ所の土橋があることがわかります。

◆三瓶山展望所（さんべ）

三瓶山を南西側から眺めることができ、ひと味違う三瓶山の姿を楽しむことができます。左から男三瓶、手前に子三瓶、右に孫三瓶、男三瓶の標高は1126m。麓には三瓶温泉がありイイフロと覚えます。

◆石組み

展望所を過ぎると道幅が狭くなり下り勾配もきつくなります。急斜面で崩落の恐れからか、街道の谷側に人為的に積んだと思われる石組みが見られます。浮き石も多いので足下に注意が必要です。

◆荷置石（におきいし）

やなしお坂の途中、街道右手に「荷置石」と呼ばれる大きな石が現れます。旅ゆく人々は背負ったままの荷物をこの石の上に乗せて、しばしの休憩を取ったと言われています。やなしお道のなかではもっとも大きなものです。

◆中ノ休（なかのやすみ）

やなしお坂の中間に位置し、街道の傍らには古い石碑が建てられています。表面には南無阿弥陀仏と刻まれており、大森代官井戸平左衛門の追善供養塔であると推定されています。木陰からは小原宿が望めます。

◆馬頭観音

やなしお坂を下りた後、志君川沿いに川下へ向かいます。志君川河口には現在橋が架けられていますが、銀を運んだ当時に橋はなく、川石や浅瀬をつたって渡河していました。橋を渡った路傍には馬頭観音が安置されています。

やなしお坂から見た小原のまちなみ

やなしお坂の途中でかつて宿場として栄えた小原（粕渕）の町を見下ろすことができます。この坂を下ると、輸送隊はこの宿場町小原へ向かいます。

やなしお坂について、次のような逸話が粕渕村誌に記載されています。

「慶応2（1866）年、長州藩が浜田城を落城させた頃のことです。幕府から派遣され、小原に駐留していた福山藩士は深夜、やなしお坂が燃えているのを発見します。敵兵襲来と驚いて向かったところ、尻無川で行なっていた鮎漁の火が濃霧に反照したものでした。藩士たちは大いに笑い、宿泊所へ戻りました。」

三瓶山（さんべさん）

三瓶山は、別名石見富士とも言われ、男三瓶山（1126m）を中心に、時計周りに、女三瓶山（957m）、大平山、孫三瓶山（907m）子三瓶山（961m）など6つの峰が環状に連なっています。日本海と中国山地の中間に位置し、3,600年前の噴火によって出来た中国地方では数少ない火山で、大山隠岐国立公園の一部に指定されています。

北麓の小豆原地区には約3500年前の火山活動で埋積された巨木群が存在し、「三瓶小豆原埋没林」として国の天然記念物にも指定されています。

石見国と出雲国の国境に位置する三瓶山は、「出雲国風土記」が伝える「国引神話」に登場します。国引神話では、三瓶山は鳥取県の大山とともに国を引き寄せた綱をつなぎ止めた杭とされています。

歴史と文化の面影をたどる
小原・浜原

小原河原 0.5km とどろき坂 0.1km 小原本陣跡 0.2km 幕末の本陣 0.4km 旧粕淵駅 0.2km 四日市別れ 0.7km 渋谷川河口

小原宿の街並み

小原河原で銀を付け替え昼食をとった後、銀輸送の一行は尻無川の河口近く、当時は石畳が敷かれていたといわれる「とどろき坂」を登り、粕渕の小原町へと入っていきました。この小原の道筋は歴史的な面影がよく残っていると言われています。当時の街道は、とどろき坂を登った後南進し、突き当たりを東へ左折、そして五つ角から右折、途中三瓶志学方面への岐路を通過し、現在の早水橋方向へと下りていきました。当時は国道375号線はもちろん、町の中央を走る町道の道筋はありませんでしたが、このように町中を右折、左折を繰り返しながら通る街道は宿場町の特徴とされ、火災時の延焼防止や馬の暴走などを防ぐ目的があったと言われています。

この小原町は現在の粕渕連担地を指しています。江戸時代には集落の集まりは「村」が基本でしたが、この村の中でも特に都市化した場所は「町」と呼ばれていました。つまり粕淵村の中で町場として発展した場所を小原町と呼んでいたわけです。江の川の水運に恵まれ、この周辺のたたらで作られた鉄をはじめ、様々な物資がこの小原に集積したこと、そして銀山街道の中継地点として人々の往来が盛んであったことによって、この町は形成されて行きました。小原町の銀山街道沿いには、本陣を務めた本波多野家の屋敷跡や幕末の本陣本林家、また山陰地方に於ける浄土真宗の根本道場として知られる浄土寺など、歴史を感じさせる風景が数多く残されています。

◆とどろき坂

産銀輸送の一行は昼食を終えるとこの坂を上り、小原宿へと進みました。現在はコンクリート舗装されていますが、当時は立派な石畳の坂道でした。とどろき坂は小原川の水音が響くことから、この名が付けられています。

◆小原本陣跡

波多野家は江戸時代末期まで本陣を務めました。母屋は既に解体され残っていませんが、当時の石垣と住宅に改修され土蔵が現在も残っています。波多野家初代物右衛門は大久保長安に召し抱えられ、数代にわたり銀山地方方を務めました。

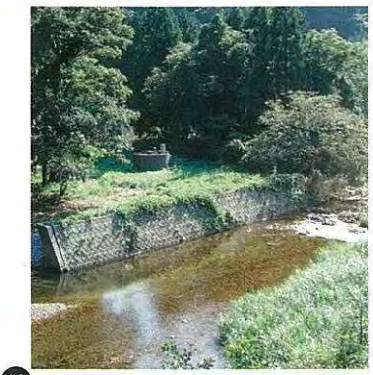
◆幕末の本陣

本林家は江戸時代末期に本陣を務めました。林家には石見銀山に赴任する代官が止宿したほか、幕末の長州征伐では福山藩主も長期にわたり駐留しました。当時の建物は旅館亀遊亭として引き継がれ往時のたたずまいを残しています。

◆浄土寺

徳治元年（1306年）開創された山陰地方における浄土真宗発祥の寺院で、石州、雲州をはじめ中国地域における有力な寺院として発展しました。浄土寺の過去帳は一般の人々の記載が始まる年号から、寺請制度研究の一級資料として扱われています。

小原河原（おばらがわら）



銀山街道の大難所「やなしお坂」を無事に下った銀輸送の一行は志君川の浅瀬を渡り、やがて尻無川河口付近の「小原河原」へと到着します。早朝に大森を出発した一行はここで別の牛馬に銀を付け替え、昼食休憩を取りました。この河原は明治になってから水田が開拓され、その広さは2町歩ほどもあったと言われています。現在では埋め立てが行われ当時の姿を見ることはできませんが、わずかに残された尻無川の自然な川面に当時の名残を見ることができます。

当時、銀の輸送には牛馬およそ300頭と400～500とも言われた人々が集められましたが、その輸送にあたっては「宿駅」と「助郷村」が大きな役割を果たしました。宿駅は幕府の役人などが公用で旅行する場合に、必要に応じて人馬の提供を行うものですが、宿駅で人馬が不足したときには、その周辺の助郷村と呼ばれる村々から人馬が徴発されます。小原宿の場合は粕淵村（粕淵、野間）、久保村、長原村、志学村、加淵村、上山村が助郷として指定されていました。このようにして、銀の付け替えが行われたこの小原河原には、大森からの一行とこれを引き継ぐ一行、併せて1,000人近い人々と多くの牛馬が集まりました。現在では想像もできませんが、人馬が集まった当時の小原河原の光景はとても壮観だったことでしょう。

地名看板と誘導看板

美郷町の銀山街道には、安心して楽しく散策して頂くため、各所に街道の誘導板と、地名看板を設置しています。ウォーキングの道しるべとして活用してください。

鏝絵

前林家の土蔵に描かれた鏝絵（鳳凰）

鏝絵は左官職人が鏝を用い民家や土蔵の漆喰壁に浮き彫りをし、その上に色漆喰を重ね、さらに彩色して絵画的に描き上げたものです。絵柄には説話や物語、身近な動物や空想上の獣などが取り上げられ、招福や厄除け、立身出世や火事除けなどの庶民の祈りや願いが込められています。島根県石見地方の左官はその高い技術力から「石州左官」と呼ばれ、優れた左官職人を多く輩出してきました。小原宿の土蔵にも明治初期に作られた鏝絵が残されています。

渋谷川河口 — 1.3km — 旧浜原駅 — 0.3km — 八幡城登山口 — 0.5km — 半駄が峡 — 0.9km — 畳岩

◆妙用寺

正和三年（1314年）に開創された臨済宗の寺院で、この地を治めた佐波善四郎実連がやなしお道を堰に所領を譲り渡した佐波実連の開基と伝えられています。境内には樹齢500年の桜があり、4月には花見の人々で賑わいを見せます。

◆八幡城跡

浜原宿に八幡城山（248m）への登山口があります。この山城はこの地域を治めた佐波氏により弘治二年（1556年）築城と伝えられています。この時期毛利氏、尼子氏の銀山争奪戦は激化し、毛利氏の一翼を担った佐波氏は、その前進基地としてこの城を築きました。

◆桂根八幡宮

至徳三年（1385年）佐和行連によって創建されました。参道脇には明治26年に建立された井戸平左衛門の頌徳碑があります。

半駄が峡（はんだがかい）

浜原の街を抜けると、やがて江の川を臨む難所「半駄が峡」にさしかかります。当時、江の川崖岸のこの道は現在の町道のはるか上を通っていました。高所の崖道に加え道幅も狭く、一歩踏み外せば数十メートル下の谷底に落ちてしまいそうな険路を、銀輸送の一行は恐怖と緊張感とともに進んでいきました。

この「半駄が峡」の呼称は、道幅が狭いため馬に積んだ荷を半分にして人が抱えなければ通ることができなかったことが由来とされ、「半駄抱」という小字名もこの地域には残っていました。現在もこの崖岸の上には、途中に貝ヶ谷を挟み、およそ800mわたって街道の狭隘な道筋が残っています。

福山藩の水野記（1670年頃の資料）には、福山から大森へ向かう際のこの道の様子が記されています。

「難所九日市二里スギ大坂難所、ガケノ下ハ五十間、六十七間モ有之谷底也、其坂ノ内ニハンダガ崖ト云所有リ、下ヘ六十七八間モ有ル所ニ長サ二間余ハ一間程ノヲ渡ス、桶の下ハ深淵也、此川三好（三次）ヨリ流川下江津川ト云、川向ハ浜田領、川向ヨリ浜田ヘ行道左リニ行ク滝原村ト云、ハンダガカイ坂ヨリ下リ二三町過テ船渡シ有リ、是ハハンダガカイ向滝原村ヘノ渡シ也」

【『水野記』巻第九　石州大森銀山手当之事（広島県史 近世資料編Ⅰ）】

浜原の街

銀山街道は、早水川、渋谷川の渓流を渡り浜原の街に入ります。この街は江の川上流の三次と下流の江津のほぼ中間に位置することから、川舟の中継地として栄えました。江戸時代には川舟を取り締まるための川番所が設けられ、街道から江の川に向かって何本もの小路も設けられていました。銀の輸送が始まって以来宿場町の性格も持つようになり、本陣や川舟を監視する浜原口番所も置かれており、水運の中継基地としても栄えました。町筋は直線的で途中には江の川の船着き場と結ぶ小路の名残が残っています。

妙用寺の桜

山門に向かって右側にある桜樹は樹齢500年、樹高30m、胸高の周3.3m、根本の周4mの大樹で、昭和51年に島根県指定文化財として登録されています。ヤマザクラ系とエドヒガン系の間に生じた雑種起源のものと見られ、ソメイヨシノとは異なるところが多く、ミョウヨウジザクラの学名が提唱されています。

江の川

江の川は、水源を広島県山県郡北広島町阿佐山（標高1,218m）に発し、流路延長194km、流域面積3,900㎢で中国地方最大の河川です。中国山地のほぼ中央を貫流し、いったんは瀬戸内海に向かって広島市の近くまで南下しますが、その後東から北へと流れを変え、弧を描くように日本海へ達します。山陽と山陰を結ぶことから古くより水上交易の要路とされ、「高瀬舟」による舟運が発達していました。明治時代に入ると、藩外交易の解禁とともに急激に発達し、内陸交通の幹線となりました。

地元では江川（ごうがわ）、中国太郎とも呼ばれ、過去幾度かの水害ももたらしましたが、水運や漁業で人々の生活と密接に結びつき、豊かな自然の恵みももたらしています。

石見から出雲へ、国境への路（みち）

～上三戸・酒谷～

◆畳岩

沢谷川の川床に畳状の岩が見られることから畳岩と呼ばれています。道路の拡幅により現在では一部しか確認できませんが、当時の銀山街道からは大きな畳岩を見ることができたことでしょう。街道はこれより出雲国との国境に向かって徐々に登りはじめます。

◆井戸頌徳碑

畳岩から800m東に建てられています。この碑は明治25年に建立されたものですが、町内には昭和9年にも建立され碑もあります。井戸平左衛門が亡くなった200年の後でも、地域の人々からその徳が偲ばれていたことが伺えます。

◆落合橋

県道から右にそれ、銀山街道をしばらく行くと千原川を渡ります。今は落合橋が架けられていますが当時は浅瀬を渡っていたようです。幕末になり架けられた橋は、丸太2本を渡した簡単なものでした。千原川の上流には足元湧出源泉の千原温泉があります。

◆九日市本陣跡

銀山から最初の宿泊地として本陣を務めた原田屋跡です。近くには銀を納めた御銀蔵もありました。本陣跡地は現在は一部更地になっており敷地内には儒学者佐和華谷の生誕碑と歌碑が建てられています。

西ノ原古道

川沿いの難所「半駄が峡」を越えた銀輸送隊の一行は、その後沢谷川に沿って東進します。現在は県道166号線が九日市、酒谷を通って飯南町へと抜けていますが、当時は近隣の田畑を避け、迂回しながら沢谷川の谷筋を上っていったようです。その道筋は現在でも各所に残されており、中でも九日市地内に残る西ノ原古道は沢谷川崖岸にありながら、昔の街道の形態がほぼそのままに残されています。川側の路肩に植えられ今も残るヤブツバキやカシ、竹は根が張りやすく路肩の崩壊や人馬・荷駄の転落防止に役立ったと言われています。また、夏場には涼を与え、冬から春先には椿は花を付け、行き交う人々に一時のやすらぎも与えたことでしょう。

沢谷川沿いにはこのほかにも銀山街道の古い道筋が残されており、案内板の設置や草刈りなど、現在も地域の方々の手によって維持保全が図られています。

九日市にある手書きマップには銀を運んだ牛馬の様子も描かれています。

輸送隊の荷

大森からやなしお坂、半駄が峡そして西ノ原古道と難所に細心の注意を払いながら運ばれたものとはどういうものだったのでしょうか。一般的には一口に銀と言われていますが、実は銀には二種類のものがあります。一つは「灰吹銀（はいふきぎん）」と呼ばれる銀山で生産された銀、そして二つ目は「丁銀（ちょうぎん）」と呼ばれる銀、これは、幕府が発行している銀で大森代官所が村々から年貢として徴収した銀です。そしてこれらの銀に加え「銀絞銅（ぎんしぼりどう）」と呼ばれる銀を絞った後にとれる銅も同時に運ばれていました。銀山で生産された灰吹銀は、産銅とともに旧暦の10月下旬から11月初旬にかけ、約130kmの道のりを三泊四日の行程で備後国尾道（尾道市）へと運ばれ、その後、瀬戸内海から海路大坂まで輸送されて行きました。

九日市宿

九日市宿全景

大森を出発し小原河原で昼食をとった銀輸送の一行は、ようやく第一日目の宿泊地、九日市に到着します。大森からは七里の道のり、慶応元年の資料によれば、宿場への到着は夕五つ時（午後8時）頃であったようです。

ここ九日市は古くは市場町として栄えましたが、江戸時代に入り銀の輸送が海路から陸路へと代わると大森からの最初の宿泊地となり宿場町としても栄えました。一行は本陣を原田屋、脇本陣を鍛冶屋に構え、随行の宰領は本陣へ、また従者は宿場内にそれぞれ分宿する一方で、運上銀は本陣近くの御銀蔵に納められました。大切な運上銀を守るため近在の住民達は不寝番を務めたと言われています。

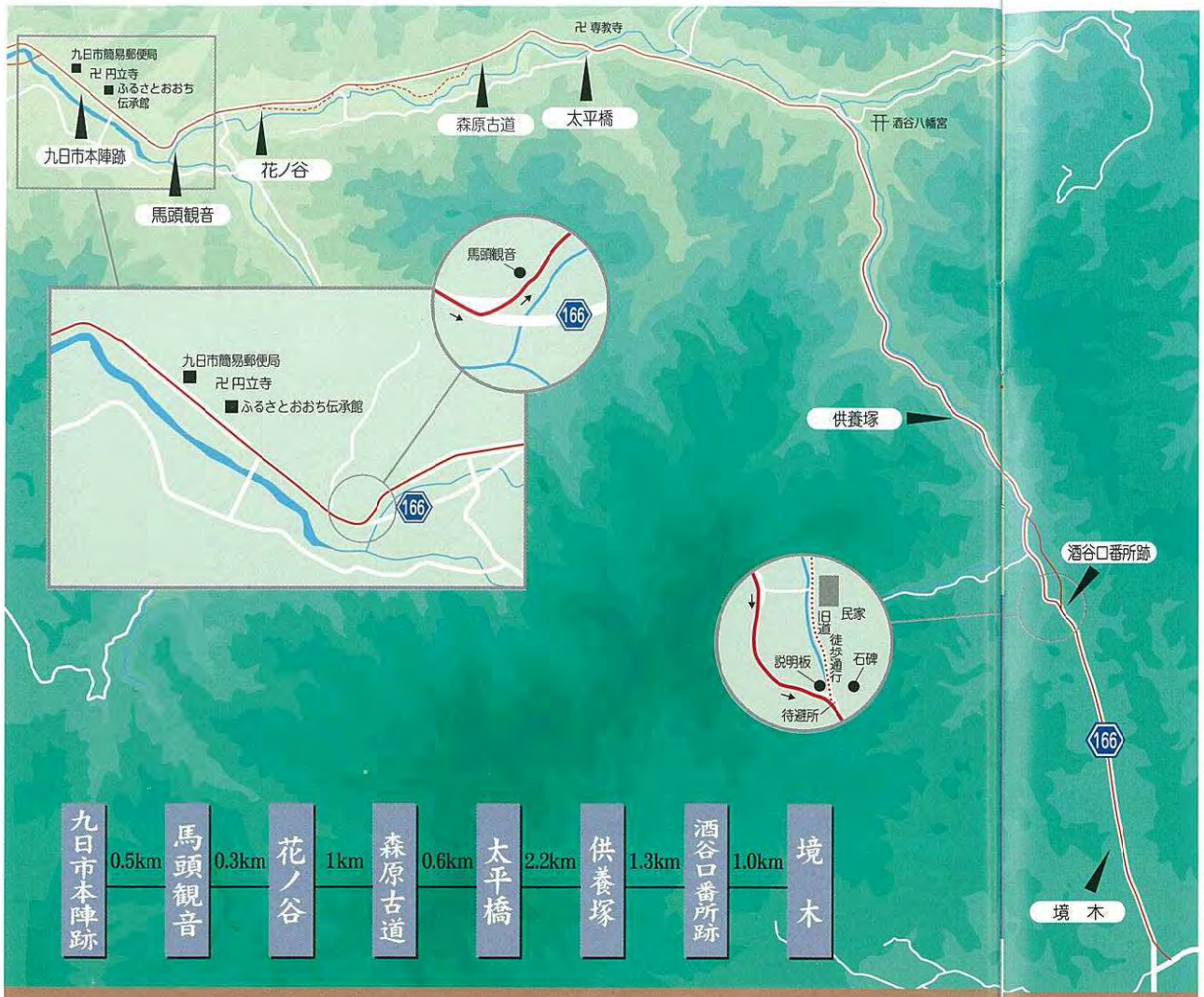
九日市本陣原田屋は江戸時代の儒学者佐和華谷を輩出し、また文化八年（1811年）には、日本で初めて実測による日本国図を作った伊能忠敬もその測量途中に止宿しています。伊能忠敬は浜田から大森を経て美郷町内へ入り、小松地、湯抱、小原、浜原と測量を行いました。

その時の様子は「測量日記」に記されていますが、この中では佐和華谷（原田屋惣太郎）の人柄についても触れられています。

廿八日朝より晴天、六ッ後浜原村出立、同所より初、川戸村字乙原石原村千原村九日市村字多田羅枝、西ノ原組片山村地先少九日市駅村迄測二里〇七丁一十二間、夫より仕越字亥ノ子田酒谷村界迄測一十四丁二十七間、行迄九日市村止宿浜原より駅二里、本陣原田屋惣太郎、此節他行好文字由、脇鍛冶屋良右衛門九ッ後二着、此夜晴天測。

説明看板

美郷町の銀山街道沿線には、街道のポイントとなる場所に説明看板が設置されており、その場所にまつわる話や由来などが解りやすく書かれています。看板の街道地図や距離表示は現在位置の確認にも役立ちます。



◆馬頭観音

馬頭観音は忿怒の形相で様々な魔性を砕き、苦悩を断つと言われています。頂上に馬頭をいただき三面六臂の像が一般的ですが、ここにあるのは梵字を刻んだ文字塔です。江戸時代には家畜の守護神、旅の道中の安全を守る菩薩として信仰されました。

◆供養塚（くようづか）

街道右手に見える古い石碑は「供養塚」と呼ばれており、石碑には南無妙法蓮華経の経文だけが読み取れます。建立された経緯は不明ですが、供養塚の地名も残っていますので古いものだと言われています。

◆大平橋下の江戸時代の橋台

太平橋の西側下に大きな石が残っています。この石は江戸時代の橋台の跡で、当時はこの上に丸太を渡して橋にしていました。明治初期の河川工事により東側の石は残っていませんが、江戸時代の橋台が今でも見られる事は珍しいようです。

◆境木（さかいぎ）

酒谷口番所を過ぎると、銀山街道は現在の県道と同じ道を進み出雲の国へと入ります。石見の国と出雲の国の国境であるこの場所には「境木」と呼ばれる木柱が建てられており、今でもこの場所は境木と呼ばれています。境木は国境の標木として古くからこの地に建てられていましたが、現在の石組みは文政九年(1826年)に、標木は平成十八年に地域の人々の手によって修復されたものです。

ふるさとおおち伝承館

九日市宿にある「ふるさとおおち伝承館」には農耕具や山仕事に使われた道具など、昔からこの地域で使われ、人々の暮らしを支えてきた様々な生活民具が展示されています。

この建物は、銀山街道の往来が盛んだった文政10年(1827年)、井戸谷村（現飯南町）に建築された前川家住宅を明治18年にこの地に移築したものです。この地域特有の石屋根（ソギ葺きの上に石を置いたもの）は昭和42年に改修されましたが、間取りや構造は江戸時代後期の面影を今でも残す数少ない建築物です。土間に立ち昔の民具を眺めていると、先人達がこの地で築き営んだ当時の暮らしを感じることができます。

酒谷口番所跡

九日市宿を早朝に出発した銀輸送の一行は、一里半ほど進むと旧酒谷村へとさしかかります。この酒谷村は出雲国広瀬藩と境を接しているため、近世に入り銀の輸送が海路から陸路へと変わると、いち早く番所が設けられました。

この番所には代官所から派遣された役人が常駐し、銀の密輸や銀製錬技術の漏洩防止など通行者の監視を行う重要な役割を担っていました。また、「御門」と呼ばれる門が街道をまたぐように建っており、他ではあまり見られないめずらしい番所でもありました。

江戸や大坂からの正路にあたり天領への出入口であるこの番所が、いかに重要なものであったかをうかがい知ることができます。

御門は明治になって取り払われ、番所があった場所は水田へと姿を変えていますが、「番所奥」「番所向」「門外」などの名は小字名として残り、昔ながらの古道の姿は今でも番所跡の傍らに見ることができます。

酒谷に残る古道

森原古道（もりはらこどう）　国史跡指定

逗水地内森原で平成21年の圃場整備に先立ち行われたトレンチ調査により発見された400年以上前の道。およそ150mに及ぶ当時のままの周囲と初代大森代官所奉行大久保長安が整備した以前の1,600年代以前の路面を残す古道。近くの県道沿いには、森原古道史跡公園も整備されている。平成30年2月13日付けでやなしお道とともに国史跡に指定された。

発見! 石見銀山街道

～ウォーキングの楽しみ方～

美郷町の銀山街道は、江戸時代の道をたどりながら歴史上の一幕を体感できるウォーキングルートです。銀の輸送路としての歴史やこれにまつわる史跡・逸話を楽しみながらのウォーキングはもちろんですが、自然豊かなこの道は、そのほかにも目、耳、肌で感じられる様々な楽しみ方があります。銀山街道に隠された四季折々の表情を探してみましょう。

★丸い石

やなしお道は標高280m程の道を進みますが、足下に注意して歩いていると時折川原にあるような丸い石が確認できます。現在は三瓶山をはじめ周辺の山々が見渡せる尾根道ですが、この丸石は、このあたりが太古の時代は湖沼であったことの名残です。太古の石を探してみてください。

★井戸平左衛門

井戸平左衛門の善政は人々の心に長く残り、その徳を偲んで建てられた碑は石見地域を中心に500基以上あると言われています。場所によって建てられた年代、形や大きさも様々で、刻字も「泰雲院殿義岳良忠居士」「井戸明府碑」など一様ではありません。

それぞれの碑を巡り、歴史を感じてみるのもよいでしょう。美郷町の街道沿いでは4基の碑を見ることができます。

★小鳥のさえずり

野鳥の声が耳を楽しませてくれます。大半はウグイス、オオルリ、メジロ、カッコウ、ホトトギスなどですが、時にはサンコウチョウ、ブッポウソウなどの美しい姿も見つけることができるかもしれません。かわいい声で飛び交う野鳥を探してみるのも楽しみのひとつです。耳を澄まして小鳥たちのコーラスを聞いてみましょう。

★猪の習性

木の幹に泥を擦りつけた跡、これは猪の習性によるものです。猪は藪の中を移動して生活するため体に虫がつきやすいので、泥浴・水浴後にはこのように体を木に擦りつける行動をします。近くには泥浴をした沼田場(ヌタバ)も発見できるかもしれません。苦しみあがくという意味の「ぬたうちまわる」という言葉は、猪が沼田場で転がりながら全身に泥を塗る様子から生まれました。猪は非常に神経質で警戒心の強い動物ですので、街道で出会うことはありません。

★アベマキ

やなしお道では樹の表面があばた状のちょっと変わった大樹を見かけます。別名はコルククヌギ。樹皮は押すと弾力がありコルクのようになっています。コルクは地中海沿岸に生育しますが、物資が不足した第二次世界大戦中から戦後しばらくの間はアベマキのコルクで代用していました。和製コルクです。

★街道の植物

銀山街道には季節や天候により様々な表情を見せてくれます。春にはネジバナ、イカリソウ、ショウジョウバカマなどの野草、秋には色とりどりの紅葉やヒガンバナなどが目を楽しませてくれます。夏のやなしお道は木陰となり涼しく、冬は落葉して遠くの景色も良く見渡すことができます。植物図鑑を片手にのんびりと歩いてみましょう。

写真 ショウジョウバカマ

★キノコ類

時期になるとやなしお道にはさまざまな種類のキノコが顔を出します。白色、橙色や赤色、道ばたに生えるもの、木の幹に生えるものなど色や形も多彩です。毒を持ったものもあります注意してください。中にはキノコとも花とも判別が難しいものもあります。銀龍草(別名ユウレイタケ)はキノコではなく腐生植物の仲間ですが、葉緑素を持たず全身真っ白で不思議な花です。6月末に歩くと出会えるかもしれません。

★ドングリ

ドングリとは、ブナ科の木の実の総称です。やなしお道にはコナラ、クヌギ、アベマキ、カシなどブナ科の樹木が多く見られ、秋にはドングリの小道と化します。どれもこれも似通っていることを「ドングリの背比べ」といいますが、よく観察してみるといろいろな形や大きさのドングリが見つかります。いろいろなドングリを集めてみるのもおもしろいでしょう。

★女三瓶(めさんべ)

三瓶山は主峰・男三瓶(1126m)、女三瓶(957m)、子三瓶(961m)、孫三瓶(907m)の峰が火口を囲んで環状に並んでいます。やなしお道から三瓶山を眺めると左に男三瓶、中手前に子三瓶、右に孫三瓶となります。三瓶山はやなしお道の各所から見ることができますが、このうち一カ所だけ女三瓶が見える場所があります。子三瓶と孫三瓶の間にわずかに頭をのぞかせますが、見つけることができるでしょうか。

★落ち葉の絨毯

やなしお道沿には落葉樹が多く、路面はいつも落ち葉で覆われています。この落ち葉が街道を優しくまもり、自然のクッションは歩く人々の足にも優しい感触を与えてくれます。秋には黄色や赤、橙色の模様も加わり目を楽しませてくれます。お餅などの食材を包むのに使われるホウ葉、天狗のうちわ状のハリギリなどを探して歩くのも楽しいでしょう。

★湧水

酒谷の街道沿いには湧水があります。ウォーキングやドライブの途中で立ち寄ってみてはどうでしょうか。夏場には自然の冷水が顔や手を心地よく冷やしてくれます。酒谷の名水は、遠方からはるばる汲みに来られる人もあります。

古地図に見る 石見銀山街道

美郷町のある島根県石見地方は古くから国絵図、古地図として描かれ、現代に残されています。これらの古地図は現在では失われつつある銀山街道の道筋や、沿線の様子を知る上で貴重な資料です。昔の地図から往時の銀山街道を見てみましょう。

正保石見国絵図写(1645年)
【国立国会図書館ホームページより転載】

美郷町浜原付近の様子です。色鮮やかに街道沿線の様子が描かれており、右側の江の川には沢谷川が合流しています。難所で知られた「半駄が峡」は江の川沿いの断崖に危険な様子で描かれており、途中には橋が渡してあることもわかります。浜原の口番所や図左下には折れ曲がった「やなしお坂」の様子も描かれています。高畑、浜原、九日市には一里塚を示す●印も確認できます。

慶安年中取調石州御蔵入図面(1651年)
【島根県立図書館蔵】

慶安年中に描かれた古地図で、現在の飯南町との町境の様子です。銀山街道は赤線で示され、図の上方の出雲の国へと通じています。この場所は石州と雲州の国境で天領への入口でもあったことから口番所が設置され厳重な警備が行われました。番所の門は街道をまたぎ、屋根付きの立派な構えのものでした。右下に描かれた番所と比べるとその違いがよくわかります。一里塚の●印と「銀山より八里四丁の記載も見られます。

石見国絵図(文化年間頃※)
【島根県立図書館蔵】

1800年代初期に描かれたと思われる石見国絵図です。銀山街道は図の中央を左下から右上へ江の川と沿うように描かれています。川の左手は幕府直轄地(天領)、右手は浜田藩で赤と黄色の色分けで区別されています。図の中央は浜原宿で妙用寺や桂根八幡宮も描かれ、小原宿には浄土寺の記載もあります。浜原ダムの建設で消滅した江の川の中州も川戸村の飛地として描かれています。

※西暦1804年～1817年

石見国絵図に描かれた境木と酒谷口番所